

## 取り戻すこと:フェミニスト・スピリチュアリティにおける癒し

### Reclaiming – Feminist Spirituality and Healing

小松加代子

**要約:** フェミニスト・スピリチュアリティとは 1960 年代に始まった女性たちの宗教を求める運動である。このフェミニスト・スピリチュアリティの運動の核心にある Reclaim (取り戻す) という言葉に注目し、神学者で哲学者のメアリ・デイリー (Mary Daly) と、魔女として幅広い活動をしているスターホーク (Starhawk) を取り上げる。フェミニスト・スピリチュアリティは歪められた物語の中から力を「取り戻し」、不完全な宗教的伝統を創りなおし、完全なものへと近づけることを目指しており、それは聖なるものを癒すことにもなるだろう。

**キーワード:** フェミニスト・スピリチュアリティ、メアリ・デイリー、スターホーク、取り戻し、癒し

**Abstract:** “Feminist Spirituality” is part of the women’s movement that aims to create a religion based on feminist values. In this paper, the meaning of this movement’s the core-term “to reclaim” will be discussed with reference to Mary Daly, a theologian and philosopher, and Starhawk, a witch and activist. “Feminist Spirituality” has been trying to reclaim power from distorted religious myths and recreate incomplete religious traditions and heal the divine.

**Keywords:** Feminist Spirituality, Mary Daly, Starhawk, reclaim, healing

### はじめに

僧侶はわたしたちの偉大なる女神を悪霊と呼び、女神がずっとこの世界を支配していたことを否定し、せいぜいよくても女神の力をサタンのもと言うぐらいだ。あるいは、この女神にナザレの聖女の青い衣を着せ—この聖女もそれなりに力を持っていたのだが—そして女神もやはり常に処女だったと言う。しかし人類の悲しみや苦しみについて、処女が何を知りうるだろうか<sup>1</sup>。

1960 年代に始まった女性たちの宗教を求める運動、すでに存在しているユダヤ教・キリスト教とは異なる宗教を求める運動を、Z. ブダペスト (Zsuzsanna Budapest) はフェミニスト・スピリチュアリティと名付けた。スピリチュアリティという言葉は「宗教」という言葉では表すことのできない思想、概念、運動などさまざまなものを指し示すものとして使われている<sup>2</sup>。

ウェンディ・グリフィン (Wendy Griffin) はフェミニスト・スピリチュアリティについて、1970 年代には一つのことを指す言葉である、またユダヤ・キリスト教会に属するか離れるかで大きな違いがあると考えられた時もあったが、現在では多様なグループや多様な人々

が参加していると述べている。その人々に共通するものは、神（あるいは聖なるもの）についてのフェミニスト的理解と、女性の声に耳を傾け女性のエンパワーを目標とすること、言葉、シンボル、儀式、魔術を重視することなどである<sup>3</sup>。

このようなフェミニスト・スピリチュアリティは、19世紀のヨーロッパで広まったスピリチュアリズムや1960年代にアメリカで変容したニューエイジ思想などの影響を受けていることは間違いない。しかし、ここでニューエイジやスピリチュアリティといった言葉でひとくくりにはできないフェミニスト・スピリチュアリティの特徴を明確にしておくことは重要だろう。

本論文ではアメリカを例に、フェミニスト・スピリチュアリティの運動の核心にあるReclaim（取り戻す）という言葉に注目し、神学者で哲学者のメアリ・デイリー（Mary Daly）と、魔女として幅広い活動をしているスターホーク（Starhawk）を取り上げる。フェミニスト・スピリチュアリティに大きな影響を与えた思想家と活動家というこの二人から、Reclaimという言葉を考えてみたい。

## 1. 取り戻す(Reclaim)こと

1969年にラディカル・フェミニストたちはレッド・ストッキングを立ち上げた。レッド・ストッキングとは、学歴の高い知的な女性たちを指すブルーストッキングという言葉と、革命の赤を組み合わせた新しい言葉だった。さらにラディカル・フェミニストがその活動グループ名として用いたのは魔女（WITCH）という言葉だった。この「魔女」という言葉は、キング・ジェームズ版の聖書のサムエル記の「反逆は魔法 witchcraft の罪」という言葉を用いたとされ、聖書上で罪とされる言葉を取り上げて、意図的に自らの象徴にしたのだった。

この魔女や魔法という言葉はその後さまざまに用いられるようになるが、グループごとにその略語としての言葉付けは異なっている。たとえば、Women's International Terrorist Conspiracy from Hell や、Women Inspired to Commit Herstory など。このシンボルを選ぶことによって、フェミニストたちは女性がそうあってはならないとされてきたものを自分たちのアイデンティティとして用いたのである。醜い、攻撃的、意地の悪い、魔術を行い人を惑わす、社会を不安に陥れる、などマイナスのイメージで語られる女性たちを示す言葉を故意に用いて、現在の社会の価値を正面から批判し、もともとその中に含まれていた肯定的な意味を取り戻して自分たちの力へと変換していくという、この意味を反転させる作業が、フェミニスト・スピリチュアリティにとって重要な運動の一つとなっていた。

たとえば、キリスト教社会の中で育った女性にとって、キリスト教会が聖なる女性に付与してきた「永遠の処女」は難題であった。処女懐胎とは、生身の女性にとっては不可能なことであり、等身大のモデルとはなりえないのは当然であるのに加え、「処女で母」とい

う特殊な状態を持って女性の理想とすることは、「処女」ではない女性たちの存在を貶める結果をもたらしていた。つまり、「乙女」や「処女」ではない歳を取った女性たちには、「醜い老女 Crone」、「意地悪な老女 hag」といった卑下を内包した言葉が投げかけられ、歳を取った女性たちはキリスト教によって無視されてきた。「醜い老女 Crone」は死や破壊と結び付けられ、恐れられる存在と考えられたのである。最悪の場合は悪なる存在として、悪い魔女、悪い継母などに結び付けられた。これに対してフェミニスト・スピリチュアリストたちは、女性すべてを肯定するために、この「老女 Crone」という言葉の取り戻しを主張する。「老女 Crone」は大地母神と結びつくものと考え、原初を示す女神たちや、原初の力を表す言葉であると見直しをする。つまり家父長制の中で、こうした大地とつながった女神たちは、その力を恐れられたからこそ低く見下げられたのであり、それに合わせて社会の中で女性たちを社会的に低い位置に押しつけるために「老女 Crone」という言葉は用いられて来たとして解釈するのである。そして、それらの言葉を自分たちに引き受け、その本来の力を持った意味を発見し発掘すること、年齢を重ねた女性にある生命力と智恵の価値を認めること、それが「取り戻すこと」なのである。

最初にキリスト教の神学を学びながら、キリスト教の抑圧的なシステムを解体し、特に女性のオリジナルな力を知り、そのスピリチュアリティを獲得するために言葉を取り戻そうとしたメアリ・デイリーを取り上げる。

## 2. メアリ・デイリーの闘い

1928年にニューヨークで生まれたメアリ・デイリーは、家事以外の仕事を見つけなさいという母の応援を受けて大学に進み、文学の分野で博士号を取り、大学で教員となった。しかしそれに満足できず、スイスに留学し、フリブール大学で哲学と神学を専門として博士号を取り、その後アメリカに戻った。1969年、ボストン大学の神学部に職を見つけたものの、終身の地位の保証は与えられなかった。それはこの前年、デイリーは『教会と第二の性 (The Church and the Second Sex)』を出版してキリスト教会を批判したため、カトリックの保守の牙城であるイエズス会運営のボストン大学では到底受け入れられなかったからとも言われている。デイリーが終身職を得られなかったことに対して、1,500人の学生たちが彼女のためにデモを行い、署名をした請願書を大学に提出し、その結果終身の地位が与えられることになった。この時の署名活動をしたほとんどは男子学生だったと、デイリーはふり返っている。というのも、まだ当時はボストン大学の神学部は女性をほとんど受け入れていなかったからである。この学生たちの運動からデイリーは、それまで考えていた教会の中の平等だけに縛られない、女性の革命を夢見るようになったという。この後30年に渡って、メアリ・デイリーはボストン大学の中で、権威との闘いを続けていくことになる。

1968年の『教会と第二の性』では、歴代教皇の文書をたどりつつ、教会が父権制社会を正当化し、女性を抑圧することに加担してきたと批判した。教会は、誰にも否定できない性の違いは存在するのであって、非行少年を屈辱から守り良識と宗教的な徳を教える方法を知っているのは女性だけであると、「真の女性」や「女性の自然本性」といった言葉で女性を特定の役割にまつりあげてきた。他方で神を男性として語ることによって、男性による社会の支配は正当であるとした。デイリーは教会が崇敬すべきであるとした「永遠の女性」とは測りしれぬほど絶望的に非人間的であると指摘しながらも、キリスト教会に対して女性聖職者の問題を取り上げるべきだと「ささやかな」提案をしており、まだこの頃はキリスト教会内の改革に期待を持っていたことが分かる。ところが1973年に出版された『父なる神を越えて (Beyond God the Father)』においては、性差別のないキリスト教は不可能だと語るようになる。気まぐれに見える神の意志に従うかどうかで、罰せられるか報われるかが決まるというような神の支配的なイメージは、社会は男性が支配するもので、女性は男性の気分に従って生きなければならないと示すのに貢献していると言う。キリスト教会への批判はそれまでもあった。しかし、神学者として、大学の神学部から批判を続けるという、専門家としての根拠をもった批判であった点、彼女は際立っていた。

1979年に出た『ガイン/エコロジー (Gyn/Ecology)』では、メアリ・デイリーはすでにキリスト教会にも絶望し、現状の宗教すべて父権制に侵されたものであると主張するようになる。女性は父権制の中で言葉を失い、その能力を消されてしまったが、女性の意識下に残された文化は生命を愛する文化であるとして、メアリ・デイリーは女性の力を引き出すことをその後の大学での使命と考えるようになる。しかしそれは、イエズス会を母体としたボストン大学の神学部の教授としてその内容は異色であるばかりでなく、それを不快に思う大学関係者も多かった。

そんな彼女を批判の波が襲う。1980年代にデイリーは、白人女性優先の人種差別主義者というレッテルを女性研究者の間で貼られることになる。それはデイリーの『ガイン/エコロジー』に対するオードリー・ロード (Audre Lorde) の批判に端を発する。ロードは世界中の女性の抑圧を分析し、その代わりに女性を勇気づけるイメージとしてデイリーが取り上げたのはヨーロッパの伝統からのみで、ヨーロッパ以外の伝統を無視し、ヨーロッパ以外の女性を無力の被害者としてしか描いていないと批判したのである。さらに、1984年にロードは、1979年にデイリーに手紙を出したにもかかわらず返事をもらえなかったと出版した本に書いたことから、デイリーがロードの批判を無視したのと考えられた。それ以降、デイリーは人種差別主義者とされ、彼女の著作もそうした批判の視点から読まれることとなってしまった。ただし、後にロードの伝記を著したアレキسس・ドゥ・ヴォー (Alexis De Veaux) が、ロードの手紙に対してデイリーが書いた手紙をロードの部屋から見つけていて、その手紙にはロードのメモが書かれていることからロードも読んでいたこと、そしてそのデイリーの手紙には、ロードの批判を受け入れていること、などが分かっている<sup>4</sup>。

1999年、デイリーの大学での地位が脅かされることになる。ボストン大学でデイリーはフェミニスト倫理の授業については、男女別々の授業を作って開講していた。男性学生を教えることを拒否していたわけではないが、女性と男性では置かれた状況が違うというのがその理由だった。ある日突然学部長に呼ばれたデイリーは、彼女の授業の履修を拒否されたとする男子学生のバックにいる CIR (The Center for Individual Rights) という極右の弁護士事務所から大学を訴えると通達されたと告げられる。それをきっかけに大学はデイリーを辞任へと追い込んでいく。1年の休職を申し出たデイリーにボストン大学は「辞任同意書」へのサインを迫った。サインを断り弁護士を立てて訴えたデイリーに対し、ボストン大学はすべての大学案内、カリキュラムからデイリーを消すという、デイリーがあたかも大学に存在しないかのような対応を取った。デイリーはこれを精神的なレイプと呼び、ショックを受けたと記している。最後には彼女も辞職を受け入れざるを得なくなった。時代は次第に保守的な、改革を認めない風潮が強まっていたという<sup>5</sup>。

2006年に書かれた『アマゾングレイス (Amazon Grace - Recalling the courage to sin Big)』では、メアリ・デイリーの力強い挑戦がまだ続いていることを示した。その中では19世紀の女性参政権運動家のマチルダ・ゲージ (Matilda Joslyn Gage) を登場させる。そして、キリスト教会が自己犠牲を高い道徳性の証拠として押しつけることに反対したゲージの言葉を用いて、キリスト教社会への批判を行っている。ボストン大学から追い出され、精神的に追い詰められたデイリーは、女性だけの時間と空間を求め、想像の未来の女性だけの社会に安らぎを見出しているようである。この中でデイリーは、人生の義務は自己犠牲ではなく、自己開発 (self-development) であって、さらにそれは他者のためではなく、自己自身になるためであるとし、創造力豊かな新しい言葉を多用している。

### 3. メアリ・デイリーと言葉の再生

デイリーは、現在使われている言葉はすべて父権制の枠内のみで意味を持つため、同じ言葉を使い同じ論理構造で語っている限り、その影響下から逃れられないと、それに代わるさまざまな新しい言葉を作り出していく。いくつかその例を取り上げてみよう。

著書の『ガイン／エコロジー Gyn/Ecology (Gynecology は婦人科)』というタイトルは、男性主導のエコロジーの中で女性が犠牲になってはいけない、という主張とともに、男性が作り上げた女性の科学 (婦人科) を女性の手に取り戻すこと、女性の癒しと記憶力を現実化させること、という意味でもある。

「老女 Crone」とは、強さ、勇気、知恵のシンボルである。年を取った女性を軽蔑する言葉を逆にし、否定されてきた女性の歴史を再発見することこそ、Crone-ology、つまり Chronology (年代記) である。男根崇拜の社会は、老人差別の社会である。そして、年を取った女性を揶揄する別の Hag (鬼婆) という言葉を使って、Hag を取り返すことを Hagiography、

Hag-ology と定義する。(Hagiography も Hagiology も「聖人伝」を指す。)そして、Syn-Crone-icities とは、Crones によって意味あるものとして経験され、認識された奇妙な「偶然」である。

メアリ・デイリーは、キリスト教会からの決別を表明したものの、宗教を否定したわけではなかった。むしろキリスト教会が歪めてしまった宗教をもとに戻し、人生を生きていく力にしようとする意図は彼女の著作の中でずっと貫かれている。その中でも、言葉、あるいは「名付け」の力は、フェミニスト・スピリチュアリティに大いに影響を与えた。

デイリーは神を名詞として用いることに反対する。「神」と名付け名詞にして対象化してしまったために神はどこか高い所にいるものとなり、そこから階級が作られてしまったので、その代りに動詞として Be-ing を使うべきだという。宇宙は常に動く動詞でしか語りえないものであるから、Be-ing として語ることで、さまざまな存在が多様な形でつながっていることを認識することができる。ここから Be-Laughing、人工的な疑似リアリティやひどいタブーを打ち破り、希望を覚醒させること、Be-Thinking、元の自己を思い出すこと、オリジナルな質問を呼び戻すこと、Be-Speaking、議論すること、言葉を用いて心理的・物質的变化をもたらすことといった言葉を作り、このいずれも宇宙の調和に参加することとする。

また、「罪を犯す」(to sin) という言葉の語源が、インドヨーロッパ語の「存在する」(to be) にあったということが発見したとき、父権制の罠にはまった女性たちの状況を理解することができたという。「罪を犯すこと」は、「存在すること」なのだ。それが現在の宗教が作り上げた罠で、罪深い女という概念は、実は女性の存在の大きさを語っているのだとし、「女性はどんどん罪を犯そう」、と語る。

女性の意見や存在をつまらないものと言う人に対しては、もともと「つまらないこと (Trivia)」とは3女神の名前であり、人生の岐路で出会う女神であり、クリエイティブなパワーの母体でもあり、女性の友情とアイデアがオリジナルの力と意義を持つことを示している。さらに、キリスト教の三位一体は、3人の女神を裏返したものであるが、歪められてクローンのようなもので同じであることを誰にも要求するようになってしまったという。そして暴力を批判しきれないキリスト教に見られる父権制は、結局死を愛する文化にすぎないと断言する。

デイリーの場合は女性だけのユートピアを夢見ていたのだが、そこでは女性たちが自分自身のユニークな力を認識して発達させれば、それこそが聖なる存在 (Be-ing) への参加を現実にするものであり、生命を肯定し祝うものとなると考えていたようである。

デイリーは2010年にこの世を去った。デイリーの使用した新しい用語の不可解さから偏屈な変わり者と避けられることも多いが、フェミニストとして彼女は思想的な冒険者であったということが出来るだろう。

#### 4. スターホークと魔女

「取り戻すこと」を一つの目的として運動を盛り上げ、現在も行動している活動家の一人がスターホークである。彼女は過去に女神信仰が存在したことを主張し、現代への女神の復活を求め、古い象徴に新しい意味を付与し、儀式をも創造しようとする積極的な運動を展開する女性たちの中でもひととき目立っている。1951年にユダヤ教徒として生まれたスターホークは、家を飛び出し掃除婦として稼ぎ、人の好意にすがってニューヨークで居候を続けていた。そんな孤独な生活のなかで、ある日夢を見る。「大空を駆ける鷹が舞い降りてきて老女に変わる。私は彼女に守られている」「誰かが西海岸に帰るよ」と言っている。この夢を見た後、彼女は西海岸に戻り、女性の精神世界について、女神信仰の歴史とその流派について研究を始めたのだった。「スターホーク」とは、タロットの「星」と夢で見た「鷹」に由来する「深層自己」を表現するものだという。

スターホークによれば、ウィッチクラフトの起源は今からおよそ3万5千年前にさかのぼる。狩猟民族に獲物の動物を呼び寄せ、狩られたものを新しい世界に生まれるように埋葬するシャーマン、豊かな恵みを表す女神、月の満ち欠け、太陽のもたらす四季、秋の収穫で犠牲となり、女神の子宮へと埋め込まれ春に蘇る「穀物神」、どれもが生命の息づく「スパイラル・ダンス」を示している。

このウィッチクラフトは、インドヨーロッパ語族の侵略から始まる父系社会の戦争によって苦しめられ、その社会の価値観で変容させられてしまう。禁欲を求める宗教は、性を神聖とする女神信仰を徹底的に弾圧したのである。スターホークは、女神信仰は想像を絶するほど古い歴史を持っていると言いつつも、現代のウィッチクラフトは過去の再興にとどまらず、女性たちがこの活動に力を入れ、積極的に女神を呼び覚まそうとすることによって、まさにルネッサンス、新生、再創生を経験しているという。これは、女性の力の正当性と恩恵を体現する女神の復活である。世界を支配しない、すべての生命に対する愛—これがウィッチクラフトの基本倫理である。

スターホークは、男性禁止をうたうZ. ブダペストのコブン（魔女の会）の伝統に学びその影響を受けながらも、女性に限らず広く共感する人々と連携する。また環境問題から政治問題までもを含めた、生活全体にかかわるものとして魔術をとらえ、活動の中心にしていく。1979年に書かれた『スパイラルダンス (Spiral Dance)』をはじめとする著書の多くは、日々の中でどのように魔術を用いるかという実践の書である。現代における魔術とは、スターホークによれば、WTO（世界貿易機関）に反対したシアトルのデモや、大企業の水の独占に反対するデモにおいてダンスを踊り、タロットカードを読み、水を呼び求める儀式を行うことである。こうした政治的な活動も、日々の自然の中に生きる術も、すべて魔女の活動なのである。

スターホークは多くの本を書き、絵本やDVDの作成もし、そしてワシントンポストの宗

教のコラムニストとして、時事を女神信仰・魔女の立場から語っている。そして宗教者として人の生と死に思いを巡らせる。また 90 年代に入って、「自然を観察することが足りない」という声に導かれて、より多くの時間を自然の中で過ごすようになったという<sup>6</sup>。そして Earth Activist Training コースを作り、パーマカルチャーの実践講座を主催している。パーマカルチャーとは、永遠（パーマネント）と農業（アグリカルチャー）と文化（カルチャー）をまとめた用語で、文化というものは、持続可能な農業と倫理的な土地利用という基盤がないことには長くは続きえないとする考え方である。農業体験も含めたこうした講座を開く一方、パレスティナの解放運動にも参加し、政治運動にも関わるといってその活動の範囲は驚くほど広い。

## 5. スターホークと運動体

既成の権力によらず、自分を取り巻く自然と自らの経験から新たな活動を生み出すことを、この女神信仰や魔女グループは実践しようとしてきた。

女神信仰の運動は、ある時点で意図的に隠蔽されてしまった過去を問い直し、数々の抑圧の中で各地に残ってきたかけらを拾いながら女神を復活させ再創造しようという、過去の再解釈と未来への創造を伴う運動である。その特徴は、大きな組織が出来上がらないことである。特定の教義を持たず、自然や人間の誕生、成長、死、再生というサイクルにおける直接的な経験に基づいて魔術の儀式は創られ、それぞれの人やグループが独創的なもの、あるいはその場限りのものを行うことができる。その運動の過程を Reclaiming というグループでの経験から、スターホークは次のように語っている。

1960 年代に始まった父権制に対するフェミニストの批判と、女神信仰や父権制以前の伝統の探求などスピリチュアルな活動の発展の中で、同様の活動をしているグループを緩やかにつなぐネットワークが徐々に出来上がってきた。そして 1970 年代後半に作られたのが Reclaiming だった。さまざまな情報が交換され、多くの儀式が創造された。80 年代には、それが政治的な活動の情報拠点ともなった。この共同体をモデルとして、各地に実験的にグループが作られ始め、初期からの参加者がその指導に訪れた。スターホークも、魔女キャンプ (Witch Camp) のプログラムを作り、要望に応じて実施していた。しかしある日、「中心から離れなさい」という声を聞く。自分が常に中心にいることはもともと意図していたわけではなかったので、これを機会に多くのキャンプに参加せず、それぞれのグループで運営するよう勇気づけるといって方向へと移行する。それ以降の Reclaiming の活動は、儀礼を自分たちのために互いに行うことと同時に、儀礼の行い方とグループ活動をどのように円滑に行うかを伝える活動を中心に行うことようになった。

また、Reclaiming は初期には入ってくる人に対して何の条件もつかなかったため、多くの人が参加し、しかもその参加の仕方が多様であったため、さまざまな問題が起きた。その

度に話し合いをし、必要に応じてシステムを変更してきたという。争いを避け、決定権を誰が持っているのか曖昧であった時期もあり、そうしたことから何回か問題が起こることもあったという。そうした経験から、組織化されない、ヒエラルキーのない共同体を作り上げ、そうした共同体を長続きさせるための方法の伝授も始まっている。たとえば、そうした共同体では、権力（power）をどのように使うか、が問題となってくる。スターホークは、我々の中の痛みは、外部の権力構造を映し出したものであるという。その痛みを癒すと同時に、同様の権力構造を作り出してはならないことは、フェミニスト・スピリチュアリティにとっては何よりも重要になる。

スターホークはパワーとは、内に存在し湧き上がるものだという。グループ内の他者の意思に反して権力を行使するようなシステムにしないためには、一人の強力なリーダーがいるのでもなく、まったくリーダーがないのでもなく、参加する人がそれぞれの責任を負い、それに応じた力を持つことが必要である。参加する人が、その人なりの参加方法を見出し、それに見合った力を持つこと、そしてその力に応じた責任を共有すること、それを理解することが必要となる。さらに誰でもが話し合いに参加でき、決定に際してはその過程が誰にも見えること、そして十分説明し納得できるものであることがそれを保障する。2011年に出された『エンパワーメント・マニュアル（Empowerment Manual）』では、状況に応じたワークショップを用意し、具体的な解決方法を提案している。

## 6. フェミニスト・スピリチュアリティとヒーリング

現在、フェミニスト・スピリチュアリティを求める多様なグループや人々が存在している。それは例えば、ダイアニック・ウィッチ、女神信仰者、カトリックのウーマン・チャーチに参加している女性たち、プロテスタントのフェミニストたちなど、特定の宗教に限定されず、また宗教団体に属する人もいれば、属していない人もいて非常に多様である。

キリスト教会の信者であっても、女神とイエスは両立可能な神のイメージであると受け取っている女性たちも多い。そうしたフェミニストたちは、磔刑や復活よりも愛について語り、奴隷制や女性への暴力、環境汚染を罪としてとらえる。そして女神を語ることによって、キリスト教会と神学がドグマに陥ることから目覚めさせようとしているのだという。キリスト教フェミニストは、女神信仰の女性たちと対立することは少なくなってきた。むしろ社会問題への取り組みにおいては、共同のネットワークを作ることも可能となっている。かつてキリスト教にとどまる人々と、キリスト教を去る人々で、改革派と革命はと分けた時期があったが、現在ではその違いは本質的なものであると言うよりは、文脈によるものと見るができるだろう<sup>7</sup>。

こうしてみると、現在のフェミニスト・スピリチュアリティは、固定の聖典を持たない、常に流動的で、変化をし、お互いから考え方を借りたり、互いに影響し進化しているもの

と考えられる。女性の話に耳を傾け、彼女たちのアイデアを展開させ、スピリチュアルな体験を肯定する、そんな安全な場を提供し、自分自身の言葉で語り、直接神と触れるものとなっている。

メアリ・デイリーはカトリック教会の組織が変革しえないものとして教会を去ることとなったが、宇宙の調和、目的因 (Final cause)、存在に参加することといった言葉を用いて、キリスト教会の教義に見出すことのできなかつた、人生を肯定し他の存在とのつながりを発見しそれを力として生きていくために、言葉が鍵であると考えた。他方、スターホークは、魔女としての活動を通して、父権制以前の女性の力を取り戻し、父権制に再び陥らないためにヒエラルキーのない共同体での生き方を模索している。

ウェンディ・グリフィン<sup>8</sup>は、名づけることは現実を創造する力であるという。そしてフェミニストが聖なるもの (divine, holy) を名づける時、現実を変化させるのだという<sup>8</sup>。フェミニスト・スピリチュアリティの目的は、歪められた物語の中から力を取り戻し、不完全な宗教的伝統を創りなおし、完全なものへと近づけることである。シャーロット・キャロン (Charlotte Caron) の言葉を用いれば、それは、聖なるものは完全なものになるためにサポートを必要としていて、フェミニスト・スピリチュアリストは聖なるものをも癒すものにならなければならない<sup>9</sup>。それがフェミニスト・スピリチュアリティの癒し (healing) なのである。

## 注

1. マリオン・ジマー・ブラッドリー『異教の女王』、早川書房、1988年、11頁。
2. Wendy Griffin, *Webs of Women: Feminist Spiritualities, Witchcraft and Magic: Contemporary North America*, ed by Helen Berger, Pennsylvania UP, 2005.
3. Wendy Griffin, *op.cit.*, pp. 55-80.
4. 2003年にドゥ・ヴォーからこの手紙の存在を知らされたデイリーは非常に喜んだという。それまでは、手紙を出したということを証明しようがなかったからである。この問題は、人種差別問題からすれば性差別問題は取るに足らないとする社会的な認識の中で、デイリーをスケープゴートにする結果となってしまった。西洋の白人女性の持つ伝統という狭い範囲から新しいイメージを作り上げようとするデイリーへの批判に、人種差別という別の抑圧システム上での批判を持ちこんでしまったために、デイリーとロードという共闘可能であったはずの両者に溝が作られてしまっただけに終わった。アドリエヌ・セレ (Adriene Sere) は、より知られている、あるいはより重要と考えられている抑圧への批判を持ち出して、別の抑圧への批判を抑え込んでしまうこと、こうしたダブルスタンダードに対して、フェミニストムーブメントはチャレンジし続けなければならないと述べている。Adriene Sere, 'In Remembrance of Mary Daly: Lessons for the Movement,' *Said It*, vol. 4, No. 2, 2011. (右で閲覧可。 <http://saidit.org/archives/jun06/Remembrance.html>)

5. Daly, Mary, *Amazon Grace*, Chapter 7, pp. 65-77.
6. Starhawk, 'Introduction to the Twentieth Anniversary Edition', *Spiral Dance Special 20th Anniversary edition*, 1999.
7. Winter, Miriam Therese, Adair Lummis, and Allison Stokes. 1994. *Defecting in Place: Women Claiming Responsibility for Their Own Spiritual Lives*. New York: Crossroad.
8. Wendy Griffin, op.cit, p. 73.
9. Caron, Charlotte. 1992. *To Make and Make Again: Feminist Ritual Theology*, NY: Crossroad, p. 217.

### 参考文献

#### 1. メアリ・デイリーの著作

*The Church and the Second Sex*, Beacon Press; Reissue 版, 1986, first published in 1968.

(『教会と第2の性』岩田 澄江訳、未来社、1981年。)

*Beyond God the Father : Toward a Philosophy of Women's Liberation*. Beacon Press, 1973.

*Gyn/Ecology : The Metaethics of Radical Feminism*. 1979.

*Websters' First New Intergalactic Wickedary of the English Language*, Harper Collins, 1987.

*Amazon Grace: Re-calling the courage to sin big*, N.Y.: Palgrave MacMillan, 2006.

#### 2. スターホークの著作

*Spiral Dance: A Rebirth of the Ancient Religion of the Great Goddess*, HarperCollins

(1981/7/30), first published in 1979. 『聖魔女術—スパイラル・ダンス (魔女たちの世紀)』、国書刊行会、1994年。

*Spiral Dance Special 20<sup>th</sup> Anniversary edition*, 1999.

*The Empowerment Manual: A Guide for Collaborative Groups*, from New Society Publishers, 2011.

Starhawk – Official site, <http://www.starhawk.org/>

Reclaiming Collective, <http://www.reclaiming.org/>

Starhawk's On Faith column in The Washington Post, <http://newsweek.washingtonpost.com/onfaith/panelists/starhawk/>

#### 3. その他

Berger, Helen A. ed. 2005. *Witchcraft and Magic; Contemporary North America*, Pennsylvania UP.

Caron, Charlotte. 1992. *To Make and Make Again: Feminist Ritual Theology*, NY.: Crossroad.

Griffin, Wendy. 2000. *Daughters of the Goddess: Studies of Healing, Identity, and*

*Empowerment*, AltaMira Press.

Klassen, Chris ed. 2009. *Feminist Spirituality: The Next Generation*, Lexington Books.

Sere, Adriene. 2011. 'In Remembrance of Mary Daly: Lessons for the Movement,' *Said It*, vol. 4, No. 2.

Winter, Miriam Therese, Adair Lummis, and Allison Stokes. 1994. *Defecting in Place:*

*Women Claiming Responsibility for Their Own Spiritual Lives*, New York: Crossroad.

マリオン・ジマー・ブラッドリー 『異教の女王』、早川書房、1988年。

---

Received on Dec. 21, 2012.